

反人種差別と靈的普遍主義

—— 日印ナショナリズムの交差と分岐 ——

田 辺 明 生*

1. はじめに

本論では、19世紀末から20世紀前半にかけてのグローバルな靈性運動と反人種差別との関係について、特に日本とインドに着目しながら論じる。19世紀末から20世紀初頭にかけては、日本とインドそれぞれが自分たちは何者であるかを自国の文化と宗教との関係において見直し、再定義しようと試みた時期である（van der Veer 2001, 2009）。日本とインドは国としての文化的特異性を示すと同時に、それぞれの文化と宗教に普遍的価値があることを知らしめることに関心があったのである。これによって、日本とインドでは、「近代仏教」と「近代ヒンドゥー教（ネオ・ヒンドゥーイズム）」の構築をはじめ、単なる制度や信条を超えた普遍的な「靈的」価値を追求、主張するさまざまな宗教的運動が展開されることになった。日本とインドの知識人は「コスモポリタン思想地帯」に参加し、自国が敬われる地位にある新たな世界を構築したいと願っていた（Bose and Manjapra 2010）。この意味において近代の歴史は「複数の競合する諸普遍主義の相互作用」として捉えることができるだろう（Bose 2010: 97-98）。

反人種差別の理念的基盤は啓蒙主義的な人権にあると考えられがちであるが、19世紀末から20世紀初頭にかけての日本とインドでは、帝國的な境界を越えて民族平等を探求する方法として、靈的普遍主義が重要であった。人間の理性を重んじる啓蒙主義は欧米中心的な人種主義や帝国主義としばしば結びついてきたため、人間存在の内奥に普遍的本質を探求しようとする靈的普遍主義は、人間平等を求めるオルタナティブの思想運動として重要な意味をもったのである。言い換えれば、日本人とインド人は自分たちの「ヴァナキュラー・コスモポリタニズム」、つまり一般抽象的な合理性に基づく普遍主義ではなく、自分たちの情動や信条の普遍的基盤に基づいたコスモポリタニズムを、靈的普遍主義を通して表現しようとしたのだ（Bhabha

* たなべ あきお 東京大学大学院総合文化研究科

1996, Bose 2010: 97)。

19世紀末から20世紀初頭の日本とインドに見られる霊的普遍主義は、いずれも欧米の人種主義の批判そして自国のナショナリズムを普遍的価値の基盤に確立しようとする動きに関連していたために、互いに共鳴し合った。霊的普遍主義はまた白人・キリスト教・啓蒙主義の優越主義を批判する国際的な倫理・霊的運動や国際主義の諸機関ともつながっていた。しかし、日露戦争のころから、日本のナショナリズムとアジア主義は、帝国主義とつながるようになった。この過程で、日本文明と西洋文明が対等であること、そして日本は他のアジア諸国に対して文明的に優越することを主張する人種主義的な理論が、日本の植民地支配を正当化するために押し出されようになった。

一方、インドでは霊的普遍主義に関する議論は、国際的には国家間の平等を実現し、国内においては異なる（宗教、カースト、階級に基づく）社会集団の調和と共存を実現すべく、反植民地的な民族運動と強いつながりを保ちながら、その役割を果たしていた。

人種や民族の平等を希求する霊的普遍主義の運動は、二度の世界大戦の勃発により政治的な重要性を失った。ただしそのような挫折にもかかわらず、霊的普遍主義はユネスコなどの国際機関や人間の平等性を求める運動において影響力を持ち続けた。人間の平等性の基礎は、多様である身体ではなく、人間性の本質に求められることから、平等を希求する運動は人間の本質とは何かを問うこととなった。啓蒙主義の理念は人間の本質として合理性を提示しているが、この理念は西洋白人男性をモデルとしており、西洋中心主義とつながることも多かったため、反植民地主義的な人種平等運動は、身体と理性を超えた霊性に人間の本質を求めることとなったのである。

2. 19世紀末アジアのナショナリズムと宗教 —— シカゴ万国宗教会議 ——

19世紀末には日本では不平等条約を廃止しようとする運動が、近代仏教運動と連動するようになり、インドでは反植民地主義ナショナリズムが近代ヒンドゥー教の形成と連動するようになった。これらの運動はヨーロッパの植民地主義に対抗して、宗教および民族の平等に基づいた新たな世界秩序を構築しようという試みであった。

人種の違いを超えた霊性のレベルでの普遍性を求めた運動は、日本やインドといったアジア諸国の文化的、政治的ナショナリズムと深く結びついていた。すなわち、この時代のアジアのナショナリズムは、世界における自国の支配権やプレゼンスを拡大しようとするものではなかった。主な動機は、自分たちの文化と宗教が価値的に西洋と対等であることを認めてもらい、そして、政治的・法的にも対等な地位を獲得することだった。このことが明確にわかるのが、1893年のシカゴ万国宗教会議での平井金三と（スワームィー・）ヴィヴェーカーナンダの講演であ

る。

万国宗教会議の日本人参加者の中で、平井は聴衆に最も評価されたと言われている。平井は1893年9月13日に「キリスト教に対する日本人の真の立場」という題で講演を行った。彼はキリスト教が日本で不人気なのは、キリスト教が帝国主義や偽善的な態度とつながっているからだと指摘した。日本と米国間で結ばれた不平等条約（日米和親条約、日米修好通商条約）を取り上げ、その背後にあるキリスト教的倫理観念を批判したのである。キリスト教のそのような独善的態度とは対照的に、日本の宗教の開かれた総合的な特徴を以下のように述べている。

我が国の歴史の始まりより、日本はすべての教えを開かれた心で受け入れて来た。そして外から来た教えは日本固有の宗教と完全に調和し混ざり合った（Hirai 1893a: 444）。

最後に平井は「我々4千万の日本人の魂は、断固として粘り強く国際的な正義という基盤に立ち、キリスト教の道徳性に関しては今後明らかになることを待つ」と述べている（Hirai 1893a: 450）。さらに平井は9月26日に“Synthetic Religion”（「総合宗教論」）という二番目の講演を行った。この中で平井はすべての宗教の一致という見解を説いた。仏教を推進することさえやめ、全ての宗教を平等に扱った（Hirai 1893b）¹⁾。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダは万国宗教会議でのすべての講演者の中で跳びぬけた人気を誇った。平井の「総合宗教論」に呼応する形で、ヴィヴェーカーナンダは「全ての宗教は正しい」と論じた。彼は、ヒンドゥー教には様々な宗教が共存しているので、ヒンドゥー教は開かれた寛容な宗教であると説いた（平野2009）。そして最後にはヒンドゥー教を超越した、「普遍的宗教」を説いた。ヴィヴェーカーナンダは次のように語る。

普遍的宗教というものがあるとすれば、その宗教の実体には迫害や不寛容というものはなく、全ての男性と女性のうちに備わる神性を認めるものであろう（Vivekananda 1893: 977）。

ここには、霊性を基盤とした近代普遍主義を見ることができる。それは、全ての人間に平等なる本質として神性が備わっているとし、普遍的な正義を求める思想である。平井とヴィヴェーカーナンダは、自国の文化的ナショナリズムのために、それぞれ仏教とヒンドゥー教の優位性を主張したとしばしば言われる²⁾。この見方は全く間違っている訳ではないが、二人の見解は単なる自民族中心主義的なナショナリズムの主張を超えて、霊性主義に基づいた人間の普遍的価値を説いたことにも注意すべきである。

3. 日本とインドの文化的交流：アジアの普遍主義を求めて

日本とインドの文化的・霊的な探求は、人種主義と植民地主義を超えた公正な世界を求める動きと相まって、互いに共鳴しあい、特に岡倉覚三（天心）（1862-1913）、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ（1863-1902）、ラビンドラナート・タゴール（1861-191）たちのあいだの豊かな交流が実現した（外川 2013）。ヴィヴェーカーナンダは万国宗教会議で大成功を収めたのち、米国とその後のヨーロッパへの旅からセイロンを経て 1897 年にインドに帰国した。ヴィヴェーカーナンダはシカゴの万国宗教会議でヒンドゥー教と仏教が再び結束する必要を訴えた。しかしヴィヴェーカーナンダは 1897 年 1 月にセイロンを訪れた後、「南伝仏教」（上座仏教）に対する好意的見解を失った。ところがヴィヴェーカーナンダは後に、彼の思想に起こった「仏教とネオ・ヒンドゥー教との関係」に関する「全面的な革命」を経験することになる（Vivekananda 1973c: 172-3）。この革命が起こったのは、岡倉との親交と、死去する 5 か月前の 1902 年に岡倉と行ったブッダガヤへの旅の影響のためであった（外川 2016, 2017, 2018）。

岡倉は 1902 年 1 月 6 日にカルカッタに到着した。ヴィヴェーカーナンダを日本に招待して京都で「アジア万国宗教会議」を開催しようと考えてのことであったが、この計画は実現することはなかった。岡倉とヴィヴェーカーナンダは会ってすぐに親交を結び、ヴィヴェーカーナンダは岡倉たちをブッダガヤに連れていった。1 月 28 日にガヤに到着し、2 月 4 日まで滞在した。

岡倉とブッダガヤを訪れた後、ヴィヴェーカーナンダは仏教とヒンドゥー教の関係について新たな視座を得たようだ。ヴィヴェーカーナンダはブッダガヤ訪問の後、歴史上の通念に反して「仏教の二つの宗派のうち大乘仏教のほうが古いと信じる」と言った。ヴィヴェーカーナンダは、小乗仏教（上座仏教）は大乘仏教より後に広まり、インドに破壊的で屈辱的な影響を与えたとして、追放されるべきだと考えた。彼の考える「全面的な革命」に基づく活動内容とは、ヴェーダーンタ思想の精神と「全ての人民に対するすばらしい共感と慈悲」を受け継ぐ大乘仏教を、大衆のヒンドゥー教に再び結びつけて捉えることであった。これが大衆のヒンドゥー教とヴェーダーンタ思想、ヒンドゥー教のインドと大乘仏教のアジアとのつながりを確立するヴィヴェーカーナンダの汎アジア的思想の構想だったのだ。

岡倉はインドに 9 か月滞在し、ヴィヴェーカーナンダやラビンドラナート・タゴールおよびその親戚と親交を得た。このことが日本とインドの知識人および芸術家の間での豊かな文化交流につながったことはよく知られている（Bharucha 2009; 稲賀 2002, 2009）。ここに、霊性と美に基づく「アジア的コスモポリタニズム」を見ることができよう。

岡倉がアジアの芸術と文化の歴史について著した本『東洋の理想（*The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan*）』（Okakura 1903）は、ヴィヴェーカーナンダおよびタゴール

との交流に触発されており、アジアのコスモポリタニズムを雄弁に語っている。

アジアは一つである。ヒマラヤ山脈は、二つの強大な文明、すなわち、孔子の共同社会主義をもつ中国文明と、ヴェーダの個人主義をもつインド文明とを、ただ強調するためにのみ分っている。しかし、この雪をいただく障壁さえも、究極普遍的なるものを求める愛の広いひろがりを、一瞬たりとも断ち切ることはできないのである（岡倉 1986: 17）。

これはアジアの多様性とともにもその内奥にある靈的普遍主義を指摘するものである。

『日本の目覚め (*The Awakening of Japan*)』では岡倉の西洋の人種主義と帝国主義への批判はより明示的になった（Okakura 1904, 岡倉 2012）。岡倉は「黄禍」という非難の反撃として、西洋帝国主義の「白禍」を批判し、有色人種のアジアの覚醒を呼びかけた。岡倉の思想はアジアの靈性主義と美に寄り立っていたが、そのことばは後に日本の帝国主義的拡大主義に利用され、引用されるようになった。岡倉自身の意図は別として、その説くところは、国境を越えた反植民地主義の普遍的価値を支持することも、アジア諸国の帝国主義的な結束を支持することもできたことから、諸刃の剣としての性質を持っていたと言えよう。

ラビンドラナート・タゴールは後に日本のナショナリズムが帝国主義に結びついていったことを厳しく批判したが、岡倉との思い出を以下のように話している。「幾年か前のことです。私は日本の国から来た一人の偉大な独創的な人物に接したときに、真の日本に出遭いました。この出遭いこそがベンガルの人々の心を、その後にもその前に起こったことにもまして、貴国に惹きつけるきっかけとなったことは確かです。私との個人的な関係において、彼の個人的な影響力において、(天心は)日本の最高の姿を体現していたのです。最高の姿というのは、それがその愛と共感において、日本の地域や一時的な権益をすべて超越していたからです」(Tagore 1929)。ここではタゴールが岡倉の汎アジア的な靈性の探求を好意的に評価していたことがわかる。

20世紀初頭の日本とインドにまたがるアジア的コスモポリタニズムは西洋の人種主義と帝国主義に批判的であり、アジア諸国が立ち上がり世界に対して価値を証明するべく自分たちの魂を表現するよう呼びかけた。しかしこの種のアジア的普遍主義は、日露戦争（1905-1906）後の日本では、帝国主義のイデオロギーと結びつくこととなった。

4. 日本とインドのナショナリズムの分岐

日本が日露戦争に勝利すると、アジアにおける反植民地主義的ナショナリズム運動に拍車がかかり、汎イスラーム主義や、汎アジア主義を刺激した（Aydin 2007）。しかしアジア諸国のナ

シヨナリズムの台頭は、同時にそれが日本とアジアが袂を分かち分岐にもつながって行った。日本のアジア主義は、日本を西洋と対等な地位に置きアジアの同胞の中で自らを最年長とする「文明の論理」との関連性を深めて行った。これは日本の探求する価値が、靈的普遍性に基づいて創造的多様性を高めようとするアジア的コスモポリタニズムから、物質的發展のレベルに基づいた進化主義へとシフトしたことを意味する。

日本の態度の変容は、第一次世界大戦後に日本が国際連盟参加の条件として、国際連盟規約の中に人種差別撤廃を明記することを提案しつつ、同時にアジア・モンロー主義を要求したことにも明確に見られる。このアジア・モンロー主義は「アジア大洋州の文明未開の地域における日本の移民と通商の自由を担保し、東亜における日本の特別な權益を認める」ことを求めるものだった。人種差別撤廃提案は否決されたが、アジア・モンロー主義の大部分は認められ、赤道以北の元ドイツ領ミクロネシア諸島は日本の委任統治領となった。

人種差別撤廃提案は日本では大衆からの支持を得ていた。人種平等の運動はもともとアジア主義を推進していた内田良平と田鍋安之助が1914年12月に結成した国民外交同盟会が主導していた。この同盟会が市民社会から37団体を集め、1919年2月5日「人種平等同盟」を設立し、社会的意識を高めて行った。ただし様々なアジアの人々との靈的・文化的連帯を模索していた日本のアジア主義は、日本の帝国主義による支配の論理に取って変わられてしまった。

岡倉の腹心の友であるタゴールは、1916年に日本と米国で行った講演で、日本の帝国主義的野望を厳しく批判した。彼の見解は『ナショナリズム』(Tagore 1917)という本で出版された。タゴールは創造的多様性の肯定を呼びかけ、ナショナリズムを国家の同質性を強要する方法として批判した。タゴールの見解は反植民地主義を超えたコスモポリタニズムの視点をもっていた。しかし日本はすでに聞く耳をもたなかった。

インドではブラヴァツキー夫人を引き継ぎ1907年に神智学協会の会長に就任したアニー・ベサントがナショナリズム運動に関与し始め、インド国民会議に参加した。第一次世界大戦中、ベサントはインドの民主化と大英帝国内での統治権を呼びかけ「全インド自治同盟 (All India Home Rule League)」を発足させた。これによりベサントは、1917年インド国民会議の議長に選出されることになる。スワミー・ヴィヴェーカーナンダの弟子であるアイルランド人女性のシスター・ニヴェーディターもまたナショナリズム運動では重要な役割を果たした。ニヴェーディターは岡倉天心の『東洋の理想』に序文を寄せ、またベサントおよび初期のナショナリスト運動に大きく貢献したオーロピンド・ゴーシュなどベンガルの若き革命家の支援をした(稲賀2005)。ゴーシュは後に著名な聖人シュリー・オーロピンドゥとなり、その組織はマザーことフランス人女性ミラ・アルファサ(1878-1973)によって引き継がれた。アルファサは4年間日本に滞在し、最後の一年(1919-1920)は夫のポール・リチャード(1874-1967)と共に、大川周明の家で暮らした経験に有する(吉永2008)。オルタナティブな普遍を求める靈的探求

と政治運動は、グローバルに広がるさまざまな人的ネットワークによって相互的に絡み合っていたのである。

5. 霊的普遍主義と国際主義

霊的普遍主義は、20世紀ヨーロッパにおける教育分野でも重要であった。グスタフ・スピラー (1864-1940) とフェリックス・アドラー (1851-1933) は1908年にロンドン大学で万国道徳教育会議を開催した (International Moral Education Congress 1908)。この会議でスピラーとアドラーは普遍的人種会議 (Universal Races Congress) を提唱し、ロンドンで1911年の開催にこぎつけた (Spiller 1911)。第一回普遍的人種会議には多くの学者や活動家が参加した。この会議は科学と宗教の交差という特徴を有するが、そこで両者を結びつけたのは倫理的・精神的な価値観であった。倫理的・精神的な普遍主義こそが、科学と宗教の限界を超え、両者を結びつけるものとされたのである。シスター・ニヴェーディター (本名マーガレット・ノーブル) は「The present position of woman (女性の現在の地位)」について、米国文化人類学の父と呼ばれるフランツ・ボアズ教授は「Instability of human types (人間の類型の不安定さ)」について、近代黒人解放運動の父 W. E. B. デュボイスは「The negro race in the United States of America (アメリカ合衆国のニグロ人種)」について講演した。この会議にはアディヤール神智学協会の会長アニー・ベサントも参加していた。会議の名誉総務委員会の委員にはエミール・デュルケーム、M. K. ガーンディー、姉崎正治も名を連ねていた。姉崎は英学塾オリエンタルホールで平井金三から学んでおり、東京大学宗教学講座の初代教授であった。この場では、反人種主義運動、反植民地主義、倫理・霊性の運動、学術・教育などの、オルタナティブな普遍を求める異種混濁的なさまざまな試みが交錯していたことに留意することが重要である (Spiller 1911)。

一連の万国道徳教育会議は、国際知的協力委員会と密接な関係のあるハーグの International Bureau of Education (国際教育局、ジャン・ピアジェが1929-1968年まで局長を務める。1969年にユネスコに編入) の設立に影響を及ぼした。国際知的協力委員会には、ベルクソン、アインシュタイン、キュリー夫人、タゴール、新渡戸などが参加していた。この組織は第二次世界大戦後には、後にユネスコに発展し、人種差別の世界的な闘いに重要な役割を果たすことになる。

世界的な教育分野で大きな役割を果たしたもう一つの組織は新教育フェロウシップ (NEF) (1921年創設) であった。NEFの起源は神智学教育友愛組織に遡る。NEFは霊性にひらめきを得た教育専門家たちと、カール=グスタフ・ユング、ジャン・ピアジェ、ジョン・デュイといった心理学や教育学の大家を結びつける役割をした。NEFはユネスコの創設にも深い影響を与えた (岩間 2008)。

このように、全ての人種と宗教の平等に基づいた戦後の国際主義の基礎には、国際的な霊的

普遍主義の諸系譜が関わっている。これは特定の宗教的理念や啓蒙主義のリベラルな合理主義で世界を変えようという試みであったというよりも、むしろ多様な思想や理念を含む異種的な諸運動が出会う場であった。霊性と倫理というオルタナティブな価値への探求は、権力と富への執着を超えた、平等と多様性と友愛に満ちた世界を想像しようとするこれらの運動において、重要な位置を占めていたのである。

6. 結 論

戦後の日本で霊的普遍主義は、左派により日本の帝国主義や人種差別的イデオロギーを招いたとして非難されるか、右派により日本が西洋の人種主義や植民地主義からアジアを解放しようとした試みであったと称賛されるかであった。この論文では、日本における霊的普遍主義の社会政治的役割が、西洋による日本の人種差別的扱いを批判する理念的根拠から、日本の帝国主義的イデオロギーの一部へとなくなっていった歴史の変容を示した。ただし、日本の霊的普遍主義は、反植民地主義と反人種主義運動で重要な役割を果たしたインドの霊的普遍主義とも重要なつながりを有していたのであり、アジア的コスモポリタニズムという豊かな文化活動の一部を成していた時期もあった。さらに霊的・倫理的探求のトランスナショナルな動きは、のちのユネスコ設立につながった戦間期の国際主義的運動とも密接なつながりを有していた。これらのことは、反人種主義の歴史において霊的普遍主義が果たした重要な役割を再評価する必要があることを示唆しているように思われる。

註

- 1) 平井金三については、吉永・野崎 (2005)、野崎 (2005)、(2007)、吉永 (2007) などを参考のこと。
- 2) 平井金三のナショナリズムについては野崎 (2005) を参照のこと。ヴィヴェニカーナンダとインド・ナショナリズムおよびヒンドゥー・ナショナリズムとの関係については多数の研究があるが、たとえば、Sharma (2013) を参照のこと。

引用文献

- 岩間 浩 2008年『ユネスコ創設の源流を訪ねて 新教育連盟と神智学協会』学苑社
- 稲賀繁美 2002年「岡倉天心とインドー越境する近代国民意識と汎アジア・イデオロギーの帰趨」モダニズム研究会編『越境する想像力』人文書院 76-102頁
- 稲賀繁美 2005年「シスター・ニヴェディタと岡倉天心における越境と混浴『母なるカーリー』、『インド生活の経緯』と美術批評の周辺ー天心滞インド期の著作へのあらたな洞察」井波律子・

- 井上章一編『表現における越境と混淆』国際日本文化研究センター 235-274 頁
- 稲賀繁美 2009 年「ロビンドロナート・タゴール, 荒井寛方, ノンドラル・ボース — 20 世紀前半のベンガルと日本との美術交流の一駒から」*Nichibunken Japan Review* 21 巻 149-181 頁
- 岡倉覚三 2012 年『茶の本/日本の目覚め/東洋の理想—岡倉天心コレクション』桜庭信之・斎藤美洲・富原芳彰・岡倉古志郎訳 ちくま学芸文庫
- 岡倉天心 1986 年『東洋の理想』講談社学術文庫
- 外川昌彦 2013 年「シャンティニケトンの岡倉天心」『南アジア研究』2013 巻 25 号 31-44 頁
- 外川昌彦 2016 年「英領インドにおける岡倉天心のブッダガヤ訪問について—スワミー・ヴィヴェーカーナンダとラビンドラナート・タゴールとの交流から」『アジア・アフリカ言語文化研究』92 巻 181-205 頁
- 外川昌彦 2016 年「ダルマパーラのブッダガヤ復興運動と日本人—ヒンドゥー教僧院長のマハントと英領インド政府の宗教政策を背景とした」『日本研究』53 巻 189-223 頁
- 外川昌彦 2017 年「スワミー・ヴィヴェーカーナンダにおける宗教とナショナリズム」『南アジア研究』29 巻 61-91 頁
- 外川昌彦 2018 年「アナガーリカ・ダルマパーラのブッダガヤ復興運動とインド—宗教的普遍主義からシンハラ仏教ナショナリズムへの軌跡」『国立民族学博物館研究報告』43 巻 2 号 121-157 頁
- 野崎晃市 2005 年「平井金三とフェノロサーナショナリズム・ジャポニズム・オリエンタリズム」『宗教研究』79 巻 1 号 73-96 頁
- 野崎晃市 2007 年「平井金三とユニテリアン」吉永進一編『平井金三における明治仏教の国際化に関する宗教史・文化史的研究 (Hirai Kinza and the Globalization of Japanese Buddhism of Meiji Era: A Cultural and Religio-Historical Study) (共同研究報告書 科学研究費課題番号 (16520060))』http://www.maizuru-ct.ac.jp/human/yosinaga/hirai_report.pdf
- 平野久仁子 2009 年「ヴィヴェーカーナンダのヒンドゥー教」『南アジア研究』21 巻 87-111 頁
- 吉永進一編 2007 年『平井金三における明治仏教の国際化に関する宗教史・文化史的研究 (Hirai Kinza and the Globalization of Japanese Buddhism of Meiji Era: A Cultural and Religio-Historical Study) (共同研究報告書 科学研究費課題番号 (16520060))』http://www.maizuru-ct.ac.jp/human/yosinaga/hirai_report.pdf
- 吉永進一 2008 年「大川周明, ポール・リシャール, ミラ・リシャール ある邂逅」『舞鶴工業高等専門学校紀要』43 巻 93-102 頁
- 吉永進一・野崎晃市 2005 年「平井金三と日本のユニテリアニズム」『舞鶴工業高等専門学校紀要』40 巻 124-133 頁
- Aydin, Cemil. 2007. *The Politics of Anti-Westernism in Asia: Visions of World Order in Pan-Islamic and Pan-Asian Thought*. New York: Columbia University Press.
- Barrows, John Henry. 1893. *The World's Parliament of Religions: An Illustrated and Popular Story of the World's First Parliament of Religions, Held in Chicago in Connection with the Columbian Exposition of 1893*. Vol. 1. Chicago: Parliament Publishing Company.
- Bhabha, Homi. 1996. "Unsatisfied: Notes on Vernacular Cosmopolitanism." In *Text and Nation: Cross-Disciplinary Essays on Cultural and National Identities*, edited by Laura Garcia-Morena and Peter C. Pfeifer, 191-207. London: Camden House
- Bharucha, Rustom. 2009. *Another Asia: Rabindranath Tagore and Okakura Tenshin*. Oxford: Oxford University Press.

- Bose, Sugata. 2010. "Different Universalisms, Colorful Cosmopolitanisms : The Global Imagination of the Colonised.'" In *Cosmopolitan Thought Zones : South Asia and the Global Circulation of Ideas*, edited by Sugata Bose and Kris K Manjapra, 97-111. Houndmills, UK : Palgrave Macmillan.
- Bose, Sugata, and Kris K Manjapra, eds. 2010. *Cosmopolitan Thought Zones : South Asia and the Global Circulation of Ideas*. Houndmills, UK : Palgrave Macmillan.
- Hirai, Kinza. 1893a. "The Real Position of Christianity in Japan." In *The World's Parliament of Religions : An Illustrated and Popular Story of the World's First Parliament of Religions, Held in Chicago in Connection with the Columbian Exposition of 1893. Vol. 1*, edited by John Henry Barrows. Chicago : Parliament Publishing Company.
- Hirai, Kinza. 1893b. "Synthetic Religion." In *Neely's History of the Parliament of Religions*, edited by W. R. Houghton. Chicago : F. T. Neely.
- International Moral Education Congress. 1908. *Record of the proceedings of the first International Moral Education Congress : held at the University of London, September 25-29th, 1908*. London : David Nutt.
- Mohan, Pankaj. 2010. "Tagore's Idea of Pan-Asian Solidarity and its Influence in East Asia." In *Globalization, Localization and Japanese Studies in the Asia-Pacific Region 1*, 89-103. Kyoto : International Research Center for Japanese Studies.
- Okakura, Tenshin. 1903. *The Ideals of the East, with special reference to the Art of Japan*. 1st ed. London : J. Murray.
- Okakura, Tenshin. 1904. *The Awakening of Japan*. New York : Century.
- Sharma, Jyotirmaya. 2013. *A Restatement of Religion : Swami Vivekananda and the Making of Hindu Nationalism*. New Haven : Yale University Press.
- Shields, James Mark. 2017. *Against Harmony : Progressive and Radical Buddhism in Modern Japan*. New York : Oxford University Press.
- Spiller, Gustav, ed. 1911. *Papers on Inter-racial Problems : Communicated to the First Universal Races Congress, held at the University of London, July 26-29, 1911*. London : P. S. King.
- Tagore, Rabindranath. 1929. *On Oriental Culture and Japan's Mission*. Tokyo : Indo-Japanese Association.
- Takezawa, Yasuko. 2005. "Transcending the Western Paradigm of the Idea of Race." *The Japanese Journal of American Studies* 16 : 5-30.
- van der Veer, Peter. 2001. *Imperial Encounters : Religion and Modernity in India and Britain*. Princeton, N. J. : Princeton University Press.
- van der Veer, Peter. 2009. "Spirituality in Modern Society." *Social Research : An International Quarterly* 76 (4) : 1097-1120.
- Viswanathan, Gauri. 2000. "The Ordinary Business of Occultism." *Critical Inquiry* 27 (1) : 1-20.
- Viswanathan, Gauri. 2006. "Spectrality's Secret Sharers : Occultism as (Post) colonial Affect." In *Beyond the Black Atlantic : Relocating Modernization and Technology*, edited by Walter Goebel and Saskia Schabio, 135-46. London : Routledge.
- Vivekananda, Swami. 1893. "Hinduism." In *The World's Parliament of Religions : An Illustrated and Popular Story of the World's First Parliament of Religions, Held in Chicago in Connection with the Columbian Exposition of 1893. Vol. 2.*, edited by John Henry Barrows, 968-978. Chicago :

Parliament Publishing Company.

- Vivekananda, Swami. 1962a. "My Plan of Campaign." In *The Complete Works of Swami Vivekananda III*. 207-227. Calcutta: Advaita Ashrama.
- Vivekananda, Swami. 1962b. "The Sages of India." In *The Complete Works of Swami Vivekananda III*. 248-268. Calcutta: Advaita Ashrama.
- Vivekananda, Swami. 1963. "Dear Mrs. Bull, 5th May, 1897." In *The Complete Works of Swami Vivekananda VII*. Calcutta: Advaita Ashrama.
- Vivekananda, Swami. 1973a. "10th February, 1902 (A letter to Mrs. Ole Bull and her daughter)." In *The Complete Works of Swami Vivekananda V*. Calcutta: Advaita Ashrama.
- Vivekananda, Swami. 1973b. "The Abroad and the Problems at Home (The Hindu, Madras, February, 1897)." In *The Complete Works of Swami Vivekananda V*. Calcutta: Advaita Ashrama.
- Vivekananda, Swami. 1973c. "My Dear Swarup, 9th February, 1902." In *The Complete Works of Swami Vivekananda V*. Calcutta: Advaita Ashrama.
- Vivekananda, Swami. 1977. "Buddhism, the Fulfilment of Hinduism (delivered on 26th September, 1893 at The Parliament of Religions)." In *The Complete Works of Swami Vivekananda I*. Calcutta: Advaita Ashrama.

要 旨

反人種差別の理念的基盤は啓蒙主義的な人権にあると考えられがちであるが、19世紀末から20世紀初頭にかけての日本とインドでは、帝國的な境界を越えて民族平等を探求する方法として、靈的普遍主義が重要であった。さらにそれはグローバルな反人種差別運動とも結びついていた。こうした靈的普遍主義の思想運動の系譜は、日印のナショナリズムだけでなく、戦後のユネスコに至る反人種差別的なヒューマニズムの倫理にも影響を与えていた。

キーワード：反人種差別，靈的普遍主義，啓蒙主義，ヒューマニズム，ナショナリズム

Abstract

This paper discusses the relationship between spiritual universalism and anti-racism in Japan and India in the late nineteenth and early twentieth centuries in the context of global ethico-spiritual movements and how such movements have significantly influenced global movements against racism in the twentieth century. Although the ideational basis of anti-racism is often seen to rest on the equality of human rights associated with the Enlightenment and rationality, I would like to argue that in late nineteenth to early twentieth-century Japan and India, spiritual universalisms were often the means through which recognition of equality was pursued across cultural, national and imperial borders. Since the Enlightenment philosophy, which posits rationality as the essence of humanity, often also provided the basis of Euro-white supremacy, the movements that pursued racial equality sought human essence in something beyond the body and rationality. While spiritual universalism came to form a part of Japanese imperialist ideology from 1930s, it is worth noting that its other lineages supported not only non-violent nationalist movement in India but also the anti-racist, humanist movement that went along with the interwar and postwar internationalism leading to the establishment of UNESCO. It is necessary, therefore, to examine the details of the conditions under which spiritual universalisms play a role in promoting equality of races, or become linked with racist and imperialist ideology.

Keywords: anti-racism, spiritual universalism, enlightenment, humanism, nationalism